

新聞新賞讀

2007年(平成19年) 11月4日 日曜日

宝永災害300年

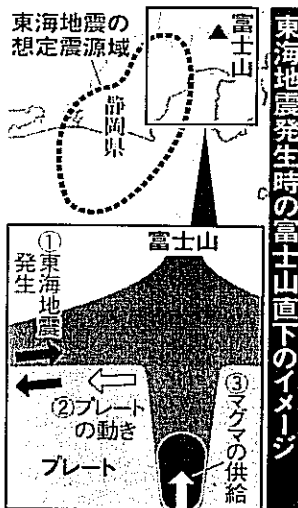


2

1707年(宝永4年)10月に東海から四国沖で起きた巨大地震後、富士山中では小地震が頻発した。富士山麓一日のうち三、四度ずつ鳴動すること甚だし。山梨県富士吉田市に伝わる「山口由富家文書」には、12月3日から地震波が音波に変わって聞こえてきた描写もある。そして16日、山腹で大噴火が起きた。古文書の記載から「宝永地震が噴火を引き起こし

富士噴火、「裂け目」が影響か

た」と静岡大の小山真人教授(火山学)はみる。宝永を含む850年以降のプレート(岩板)境界で起きたとされる地震を調べると、13回のうち11回で、前後25年以内に鳴動などの火山活動の変化が富士山であった。



東海地震発生時の富士山直下のイメージ

小山教授は「地震でマグマだまりが揺すられると火山ガスが発泡してマグマが噴き上がる」と説明する。日本大の高橋正樹教授(火山地質学)は、富士山周辺に海側から沈み込むプレートの地下構造から、宝永地震と噴火の関連を指摘する。地震波の解析結果からは、富士山の直下でプレートが東西に裂けている様子が見える。

高橋教授は、今後も東海地域で巨大地震が起きると、西側のプレートは、よりに西に動くため、裂け目が広がりマグマが上がってくるとみて、「この300年間でマグマは大盤に地下にたまっている。東海地震が起きれば富士山が噴火する可能性もある」と強調する。現在、富士山噴火の前兆はキャッチできるのか。気象庁は「他の研究機関の協

力も得て地震や地殻変動を監視しており、宝永級の噴火

が起きる場合に予兆はとらえられる」と語る。

同庁は噴火に関する「警報」を年内にも出せるよう準備を進めており、宝永級の噴火では早ければ数週間前に警報を出せると見込む。近年、地震計や傾斜計、全地球測位システム(GPS)などの観測網が充実してきたことが背景にある。

だが、防災科学技術研究所の鶴川元雄・火山防災研究部長(火山物理学)は「富士山では宝永のような大規模噴火はまれ。爆発を伴わない中小規模の噴火ではデータが少なく、今の観測機

観測網不足の指摘も

器数では地下のマグマの位置を推定するのは困難」と観測体制の拡充を訴える。小噴火の予兆でも周辺観光地の客足に影響し、正確な状況把握は欠かせない。とはいえ富士山には、噴火予知に成功した北海道・有珠山のような豊富な噴火の記録はない。観測機器の設置には最高で約1億円かかる。気象庁は「他の山の監視体制も踏まえ、現在の富士山の観測網は適切」とし、具体的な拡充計画はない。政府の試算では、東海地震が30年以内に発生する確率は87%。地震直後の噴火を考えるなら、宝永災害300年の今こそ、監視体制のあり方を真剣に議論するタイミングだろう。